

# 東北を写す

—東日本大震災の前と後の光景から—

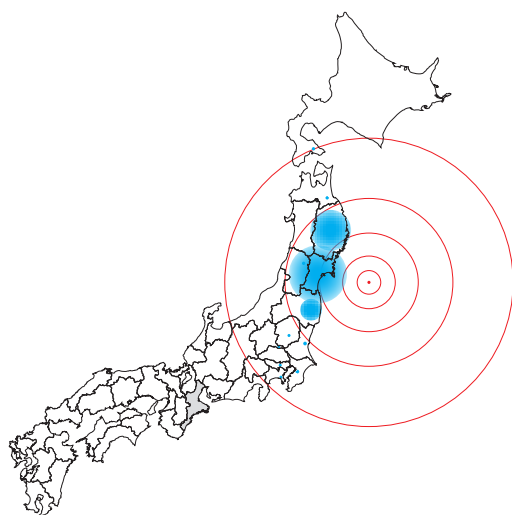
平成 23 年

**8月21日 日 14時-16時** (13時30分開場)

会場：三重県生涯学習センター 2 階 視聴覚室

問い合わせ先 (三重県立図書館)：TEL 059-233-1182

入場無料  
申込制  
(先着120名様)



**浅田 政志** (あさだ まさし)

写真家。1979 年三重県生まれ。2000 年、日本写真映像専門学校卒業。2004 年、東京・スタジオフォボス勤務。2007 年、写真家として独立。2008 年、写真集『浅田家』を出版。第34回木村伊兵衛写真賞に輝く。全国各地で浅田政志写真展「浅田家」開催。2010 年、三重県立美術館にて「Tsu Family Land」浅田政志写真展開催。写真集『NEW LIFE』を出版。その他、各地のアート・プロジェクトに多数参加。2011 年7月『八戸レビュー』(共著)を出版。



**松原 豊** (まつばら ゆたか)

写真師。1967 年三重県生まれ。三重県津市(旧美里村)在住。東京写真専門学校名古屋校卒業後、アシスタントを経て独立。NAGI、kalas など地域文化誌の撮影に携わる。2010 年、写真展「村の記憶」を三重県立美術館、多気町立勢和図書館で開催。2011 年 6 月 1 日、写真集『村の記憶』を月兎舎より出版。同年 9 月、新宿二コンサロンで写真展開催予定。名古屋ビジュアルアーツ非常勤講師。(社)日本写真家協会会員。

©浅田政志 2011 年



# 東北を写す

―東日本大震災の前と後の光景から―

三重県出身の2人の写真家が、この度、作品集を出版しました。

浅田氏は、大震災前に八戸市の人々のエピソードをもとにその姿を写し、写真集『八戸レビュー』（共著）をまとめました。松原氏は、平成の大合併により消滅した三重県の「村」の面影を写した写真集『村の記憶』をまとめた後、今の東北を写すため、現地に向かいました。

東日本大震災の前と後、2人の写真家はどのような東北を写し、どのように感じたのでしょうか。おふたりの作品を鑑賞しながら、東北の地の魅力を考えたいと思います。

## プログラム

- 1 「はっちの“八戸レビュー”に関わって」 浅田 政志氏
- 2 「東北の“村の記憶”を探して」 松原 豊氏
- 3 フリートーク

## 申込制（先着120名様）

トークライブ入場で希望の方は、下記の方法でお申し込みください。  
先着120名様をご招待します。お申し込みの際には、**お名前、電話番号、入場希望人数**をお知らせください。  
なお、お申し込みが定員になり次第、締め切らせていただきます。

**お申込先(件名)：三重県立図書館「東北を写す」係**

**電 話 059-233-1182**

**F A X 059-233-1191**

**Eメール mie-lib@library.pref.mie.jp**

**窓 口 三重県立図書館カウンター**

\*お申し込みいただいた個人情報、今回の目的以外には使用いたしません。

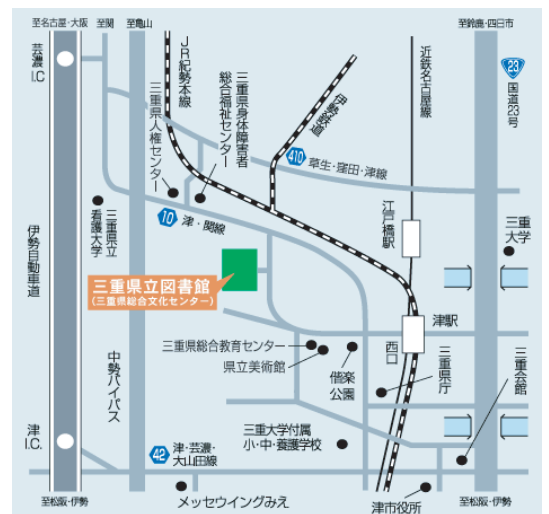
## 同時開催

### 「東北を知ろう、東北へ行こう！」展

場所：三重県立図書館 展示コーナー

期間：9月29日(木)まで

\* 休館日 8月1日、8日、15日、22日、29日、9月5日、12日、20日、26日



## 交通のご案内

三重県総合文化センター 〒514-0061 津市一身田上津部田 1234

- 鉄 道 / 近鉄・JR 津駅下車
- バ ス / 津駅西口から約5分
- 徒 歩 / 津駅西口から約20分
- タクシー / 津駅西口から約5分
- 自家用車 / 伊勢自動車道津インターから約15分
- 芸濃インターから約15分

\* 工事のため、駐車場の一部が使用できません。公共交通機関のご利用をお願いいたします。



## 「八戸レビュー」(美術出版社)

梅佳代、浅田政志、津藤秀雄 3人の写真家と88のストーリー

八戸市民と3人の写真家、梅佳代、浅田政志、津藤秀雄によるコラボレーション・プロジェクト「八戸レビュー」。88人の八戸市民が文章で描いたエピソードをもとに、3人の写真家が八戸の人々の肖像写真を撮影。8カ月にわたる期間、作品制作に参加した市民はのべ400人以上、そこに紡がれた88のストーリー。2011年2月、青森県八戸市に誕生した「八戸ポータルミュージアムはっち」で展覧会「八戸レビュー」が開催され、会期中に東日本大震災が起こった。3人の写真家とたくさんの八戸市民が、ともに作りあげた「八戸レビュー」。森本千絵アートディレクションによる、その全記録。



## 「村の記憶」 松原 豊 (月兎舎)

平成の大合併で、三重県から「村」の名が消えた。もちろん、その場所がなくなった訳ではない。それでも、何かが変わってしまう気がした。村が消える。……そう意識した瞬間、残したいものはふるさとの風景だったとの思いが蘇る。自分が移ろいゆく時代の境界線上にいるという喪失への焦りに突き動かされて、4×5インチの大判カメラを担ぎ、村を記憶する写真師として、かつて「村」だった土地を訪ねて回った。すべての場所で、生まれ育った土地の記憶を刺激する濃厚なふるさとの匂いと再会することになった。じっくりと時間をかけ、フィルムの銀粒子に残ったふるさとの気配——「村の記憶」。あなたのふるさとも、きっとここにある。http://www.murakio.com